

全身の細胞で考える 知の冒険を始めよう

情性態から脱するソクラテス対話の力

武田 康弘 白樺教育館館長

わたしは、フィロソフィをギリシヤ語の意味通り「恋知」と直訳して立場にしています。それが、「客観知」が成立する以前の、人が生きる意味と価値を問う必須の営みだと思っからです。『白樺教育館』では、こどもたちの勉強も「意味論」*1として取り組み、知の身体化を目指しています。高校・社会人クラスでは、生活世界(日常の細事・仕事・活動・趣

味)の視点で、本などの活字媒体もイキイキ考える一手段と位置づけて利用し、自由対話による「知の冒険」を続けています。

「優秀」なプログラム人間

インターネット、TV、書物、講座、研修など溢れる情報の中で、自分で考えるのはなかなか難しい作業です。誰かの意見に共感してオウム

返しだったり、反射的に判断ともつかぬ判断をしていたり、どうも自分の頭で考えているのとは違う……。現代社会において、脳をイキイキと働かせ、意味をつかみ、慣習にストップをかけて自分で「考える」というのは、なかなかの大事業のようです。

わたしたちは長年の教育のおかげで、決まっている「正解」を早く

確実に導く技を仕込まれていますから、試行錯誤で失敗を繰り返し自分で考えること、「主観性の知」を鍛えることを知りません。頭を使うというと、新しい知識を詰め込むことと思いがちです。「頭がいいのは、テストで高得点が取れる人のこと。だから東大出が一番頭がイイ」というふうに。

いまの常識ではそうなのでしよう。でも、暗記中心でパターンを身につける勉強をし、情報知に支配され、研修や講座で受動的に学ぶことに終始していると、優秀なプログラム人間に陥って頭イキイキとはいきません。外付けの知ではなく内発的な知にできないと、脳は停滞し情性化して紋切型の「優秀人」になってしまう。

見かけは優秀でも中身は貧弱。覚

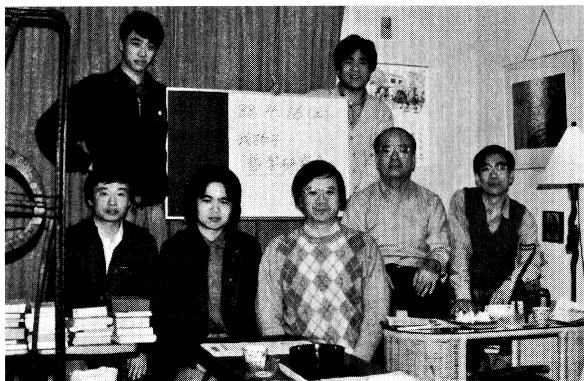
える頭の記憶マンは、意識の水面下を見るのが苦手です。「客観知」ばかりを貯め込むと、内から生み出す力が抑えられて「主観性の知」が育ちませんが、これでは手段と目的が逆転していますので、生きる意味まで消えてしまいます。「私」の関心・必要・欲望から出発する内側からの頭の働きを持たないと、「昆虫人間」になってしまわないでしょうか。

知のありようを変えたい —35年前の決意

外付けの知が支配的な今のままでは、一人ひとりから立ち昇る魅力を育てる社会ではなく、様式が意識を支配する儀式的な社会になってしまいます。それを変えるには、情性態*2となっているわたしたちの暗

黙の思想・価値意識の変更が必須ですが、これはもう言語に絶する難事で、ドン・キホーテのごとく奮闘しなければなりません。

わたしが若気の至りで私塾を立ち上げてこの不可能事に挑んだのは35年前、24歳のときですが、それは、「アリの一穴、堤も崩す」ということで、この方法しかないと考えたからでした。この路線は今日まで一貫として変わりません。極小であることは長続きする条件であると共に、却って深く人の心を捉え動かすと思つたからです。その通りとなりました。こどもたちの進歩と種々の活躍に留まらず、政治や企業や官の世界にも、参加者たちが自分を変え飛躍したために、新たな世界を拓くことになりました。思いもよらぬ成果が次々と得られたのです。



1988年4月 第59回哲学の会で。前列左端は福岡浩彦さん(当時は我孫子市議会議員、後に我孫子市長、現在は消費者庁長官。右から二番目は佐野力さん(当時はIBM社員、後に日本オラル初代社長)中央は筆者。

小学生からの勉強の仕方が自分の頭で考えるための鍵

では本題です。自分の頭でイキイキ考えるためにはどうするか、白樺教育館のソクラテス教室でわたしがしていることを少しお話しします。

まず小学生の国語の音読ですが「スラスラ上手に読めるように」はよくありません。アナウンサーのように読むのは外側からの読みで、内側からの知を育てないのです。情景を思い浮かべ、感情移入し、意味をつかみながら読む練習をします。ゆつくりがよいのです。このような読み方を身に付けると、文脈に沿って全体の意味をつかむ能動的な読書が可能になります。部分読みの「受験国語」の達人は、字面しか分からず、愚かです。

どのような学習でもみな同じですが、目的は「意味をつかむ」ことです。算数で言えば、公式を覚えてあてはめる学習は、外付けの知でしかなく内的な論理の世界が広がりません。例えば、面積は広さを数字で表す必要から生まれた概念ですが、元の意味が分かれば、公式など知らなくても誰でも納得でき簡単に解けます。体積(大きさ)も同じ。速さの問題も、三つの公式を覚えさせるのは無意味です。速さという概念(一定の時間にどれだけの距離を進めるか)が了解できると、時間や距離を求めることも簡単です。

ただし、計算問題では理屈を先行させるのは禁物。1年生であれば、10-1から10-9までの9種類の計算を何十回も繰り返すことが先です。それが身体化しないと、くり

下がりの引き算の意味を教えてもうまく頭に入りません。これらはほんの一例ですが、さまざまな教科において、このような方法論がイキイキ脳を育みます。

大学クラスは楽しい哲学対話で頭全開!

白樺教育館の大学クラス(高校生(社会人)では、1991年より20年間、ディアレクティケー(問答的思考法)による哲学対話の授業を続けています。意味充実の面白い授業で、4時間がアツという間に過ぎます。お茶にコーヒー、おやつも食べながらの頭全開!です。時事問題、各自の日々の体験から考えたこと、背景を知りつつの本の読解、思考の基盤となる論理学など、幅広く取り組んでいます。力を抜き、自由に、

ザックバランに対話すると、どんどん頭が回り止まりません。そのなかで自分の思考や存在についてもよく自覚できるようになります。

ここ数年間、大学クラスに熱心に通う参議院所属の官僚である荒井達夫さんは、「初めのうちは、自分のもつ専門知が通用せず、頭が真っ白状態だったが、半年が過ぎるころから自分でも驚くほど頭が回り出し、面白いようにアイデアが湧くようになっていった。頭がハッキリし、どこまでも前に進むようになってほんとうに脳が活性化する。不思議なことに、子どもの頃のことまでよく思い出す」と話しています。

「哲学する」とは?

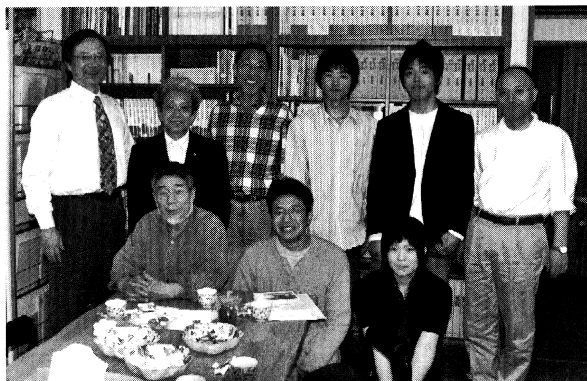
白熱教室は言論ショーにすぎない

善美に憧れ、何がほんとうかを目



2011年10月 月面観望 白樺教育館の屋上で。小学4年生と5年生。

2006年6月 大学クラス終了後、金泰昌さん(日中韓の「公共哲学」運動の中心者・京都フォーラム代表)も特別参加・左から二番目。左端は筆者。右端は荒井達夫さん(参議院調査室)



がけて言葉を用いるのがソクラテス
出自の哲学(知への憧れ≡恋)です
が、それがデイベートの否定である
ことを知る人はほとんどいません。
「言語ゲーム」≡勝負としての言論
技術を磨き、それを教えていたのが
古代都市国家のアテネで活躍してい
たソフィスト(弁論家・教師)ですが、
ソクラテスは、華やかに活躍をする
彼らを、ほんとうのことは何も知ら
ないが、外付けの知識と言論詐術に
より知っていると思い込んでいると
批判したのでした。ソフィストと呼
ばれていたデイベートの達人を相手
に議論したソクラテスは、内側から
意味を問う自身の方法をディアレク
ティケーと呼び、その営みを恋知(≡
哲学)と命名したのです。

大勢の人を相手に、自分が隠し持
つ結論に誘導する技法に長けている

人は、哲学者ではなく雄弁家(ソフ
イスト)と呼ぶべきです。哲学の本
質とは、善美に憧れる心による知恵
との恋愛です。知識に頼らず、権威
に頼らず、自分の頭をイキイキと用
いて考えることですので、とても面
白く、有益です。ソクラテスは、「多
くの人と問答をした結果、思慮の点
では、知識人よりもツマラナイ職業
と思われている人の方が九分九厘優
れていることを発見した」と言いま
すが、それは、自分の経験をもとに
生の内側から考えないと、よく生き
ることに資する有用な知が得られな
いことを示しています。

哲学とハーバード大学とは何の
関係もありません。社会思想の専門
家が行うトークショーは、デイベ
ートの類でしかないのです。

よく哲学するためには

まず、日々の経験を流れゆくま
まにしないで「私」に根づかせ、意
味づける営みが必要です。何よりも
自分の意識の水面下をみる省察が大
切なのですが、それは、物事・事
象・周囲の環境を五感全体でよく感
じ知る営みと一つです。わたしには
どのように見えているか、その意識
化の作業です。そのためには、パン
コンの前にいないで、人と話し、街
に出、自然に触れないといけません。
意識にパワーが宿り、明晰になりま
す。イメージを豊かな言葉にするに
は、言語的世界以外の経験が大切な
ので、比喩的には、哲学とは全身の
細胞で考える作業と言えます。

座標軸はわたしの存在にありま
す。これは素晴らしい事で、だから

こそ民主的な倫理に基づく自由対話
が要請されます。意識存在である人
間は、ほんらいみな哲学者なのです
が、それを自覚すると自己の存在は
豊かになり、価値づきます。自分で
考えるイキイキ頭をつくるのは、何
より素敵でお得な生き方ではないか
と思います。いかがでしょうか。

*1 意味論

一般意味論(General Semantics)ともいう。アル
フレッド・コージブスキー(1879年~1950
年)を始祖とし、1900年代までに構築された考
え方である。コージブスキーは「意味反応」をシ
ンボルとしての言語だけでなく、周囲の環境にお
けるあらゆる事象の意味に対する人体全体の反応
を指すものとした。例：レモンを見て唾液が分泌
されるような反応、条件反射を含む。

*2 情性態

実践的情性態(Practical Affect)についてはジャン・
ポール・サルトルの思想を参照されたい。人間の主
体的実践が疎外され客体化・固定化することによ
って、様式や制度によってつくられた存在として
ての実践的情性態がつくられる。サルトルはこの
ような受動的な存在としての人間は、「共同の実践
をつくりだすことによって、真の活動性をとりも
どすとしている。

たけだ・やすひろ

1952年東京・神田生まれ。1976年より
眼下に手賀沼を望む我孫子市で独自の
私塾「白樺教育館」を主宰。また、東洋
大学などで哲学や公共についての特別
授業を担当。我孫子市「白樺文学館」の
全コンセプトを作成し、初代館長を務め
る(1999~2001)。2009年10月から1
年間、参議院行政監視委員会客員調査
員となり哲学講義(「主観性の知」を育
成する参加型授業)を行う。詳細は白樺
教育館「公共をめぐる哲学の活躍」
(<http://www.shirakaba.gr.jp>を参照)。

